

おぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 97 号

平成10年12月15日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 実験実習機器センター 宮川 清志)

表紙写真募集中!!

冬の見本林

“アムステルダムの石畳” ……中村 正雄… 2	旭川医科大学に留学して
私の卒後10年 ……石谷 敬之… 3	アイノリィー ピーター ゲサセ… 6
解剖学実習を終えて ……鶴岡 美穂… 4	公開講座実施される …… 7
解剖学実習を終えて ……中村 明枝… 4	研究室紹介 生化学第二講座 …… 7
解剖体慰靈式 …… 4	訃 報 …… 8
クラブ今昔	教官の移動 …… 8
弓道部 ……石山 桃子… 5	体育大会実施される …… 8
合唱部 ……田代 直彦… 5	窓 外 ……北村久美子… 8



“アムステルダムの石畳”

化学教授 中村 正雄

昨年（1997）の夏、学術振興会の派遣事業で滞在したアムステルダムの生活を書きましょう。

受け入れ先のアムステルダム大学、E.C. スレーター研究所のW博士は数年前迄面識のない私の20年来の知人でした。それは私の研究分野と彼の分野が、私の研究のスタート以来いつも近い位置にあった為です。彼が不意に私の所を訪れることになったのは、私が旭川に赴任して間もない3年前の初冬の頃です。京都で開かれた日本-オランダ間の共同研究グループの会議に出席の折、“君の所を尋ねたい。”とWから連絡がありました。殆んど同じ世代であった為か、すぐに彼と打ちとけました。驚ろいたことにWと私はすでに何人かの共通の知人を持っていました。私のかつての留学先にWは共同研究の為に数週間滞在していたこと。私が共同研究を希望していたローマ第2大学の研究室に彼は半年ほど滞在し、私の友人達とすでに知り合っていました。Wと一緒に仕事をするのも悪くないと思いました。

アムステルダムに到着する直前に立ち寄ったイタリアは日射しの強い乾いた夏で、友人は研究の打ち合わせよりは週末の旅行が話の中心でした。一転してアムステルダムは小雨の降る肌寒い天気です。Wの研究室のHの出迎えで、我が家のアムステルダムの生活が始まりました。アパートは中央駅から2～3分、観光客相手の歓楽街と背中合わせの位置。アパートからWの研究室はニューマルクト広場（ここにレンブラントが描いた“テュルプ博士の解剖学講義”の舞台となった建物があります。）を経て歩いて20分の距離です。毎朝、運河沿いの石畳の歩道を路上生活者と犬の汚物、それに自転車者の疾走に注意しながら繁華街を抜けるとレンガ造りの住宅街に辿り着きます。ここには市電の路線に沿ってカフェ、デリカテッセン、タバコ屋、革細工の商店などがあります。研究所の近くには植物園と動物園があり、入り組んだ街並の間を楽しみながら歩き始めたころはアムステルダムには珍しい暑い夏の始まりでした。

Wの研究室での仕事はまず実験に使う変った酵素を海藻から精製することです。Wの論文では北極海附近に成育する海藻のなかにハロゲン化有機化合物を光合成と共に産生する種があり、これが白夜明けにみられる北極附近のオゾン層の後退と関係しているとのことです。Wの試算ではこれらの海藻が年間産生するハロゲン化有機化合物の量は、人間活動で大気中に放出される量を越えるとのことです。酵素の精製はHの指導で1週間で完了しました。冷房の効いた実験室から、運河が夏の陽にキラキラ光るのが良く見えます。すでに休暇を終え研究室へ戻った学生と一緒に同じ部屋で実験をしました。彼はロックが好きで私に気にならないか尋ね、ラジカセのボリュームを上げて実験をします。Wは彼と打ち合わせの為に実験室に入ると、まずスイッチを切ります。やがてWが出て行くと、彼は再びテープを回しこれに合わせて歌います。新しい環境で研究をスタートする時に必要なことは、自分に必要な実験器具、測定機をどうすれば容易に使用できるかがポイントなのは言うまでもないことです。物おじせずに自分の希望を伝えないとさっぱり仕事が進まないことになります。その点、この研究所で出会ったスタッフ、事務の方達は私が困った時を察知しているように手を借してくれます。

昼休みに食事がてら行ったワルトハイム公園が研究所の近くにあります。運河沿いの芝生に若い男女が日光浴をしています。庭園の隅に割れた厚いガラスを素材とした記念碑があります。このあたりは第2次大戦前にユダヤ人達の街があり、ここから拉致されついに戻らなかった彼等への追悼の言葉が碑に述べられています。

自分の為に自由に使える時間は次第に至福の時と思えるようになって来ました。今度、そんな時間を手に入れることができるのはいつのことか、石畳の道を歩きながら思いました。



私の卒後10年

第10期生 石谷敬之

私は昭和63年に旭川医科大学を卒業した。今年は卒業後11年目である・まる10年が過ぎたことになる。この10年間、今思うとあっという間に過ぎたように感じる。しかし、さすがに10年である。平均寿命の約8分の1に相当する。思い起こせば色々なことがあった。なぜ私に「かぐらおか」への掲載依頼がきたのだろう。これを機会にこの10年間を振り返ってみた。

現在私は卒後11年目であるが、医者としては10年目である。私は卒業した年の医師国家試験に合格できなかった。1年間国試浪人をしたのである。初対面の先生と話しをする時、医者になって何年目か聞かれることがある。旭川医大に関係のある場合は、同じような意味で何期生かと聞かれる。私は10期生として入学し卒業した。1年間国試浪人したため、医者になったのは11期生と同じ年である。しかし、11期生と一緒に学んだことはない。何期生と聞かれたときは「10期卒、11期相当」と答えることにしている。他にも色々な理由で、自分が何期生なのか答えに迷う先生もいると思う。

昭和63年の旭川医大の国家試験合格率は、例年と比べ低かったと記憶している。国試に落ちたものたちが集まり、基礎臨床棟7階のカンファレンスルームで勉強会をした。国試に落ちたものだけというのは、安心なような心細いような妙な感じであった。浪人中前半の半年は集まっても、皆あまり気合いが入らなかった。勉強会に集まったはずが、天気の良い日はテニスをしていた。平日の日中におばさん軍団とテニスコートの取り合いをしていた。おばさん達は「いい若いもんが仕事もしないで」と思っていたに違いない。後半の半年、特に12月頃からは尻に火がついた。さすがに真面目に勉強した。大学受験の時以上に真剣だった。今までの人生で一番勉強した時期かもしれない。医者になってからは真面目に勉強していないことがバレてしまったか。翌年の試

験で何とか医師免許を手にすることができた。

学生の頃、私は外科系を志望していた。大学6年生の頃、今後何科を専攻するか第2外科と産婦人科とで迷った時期があった。産婦人科の方が対象臓器が少ない分、私のような頭の悪いものでもやっていけそうな気がして産婦人科を選んだ。今考えると産婦人科の諸先輩に対して失礼であった。

平成元年に産婦人科に入局したのは私を含め3人であった。私は大学で1年間卒後研修を受けた。医学の知識はある程度あったが、医療を行うには全くの素人であった。諸先輩、看護婦さん、患者さんにはご迷惑をおかけした。本当に皆さんにお世話になった。医者としての最初の基礎はここで学んだ。

当時私は雑務の多さに閉口していた。そのため、大学から離れられる子宮癌のバス検診での地方遠征が楽しみであった。検診の合間に旭川ガン検診センターの方々とゴルフなどをして楽しんだ。大学に戻ったら例の雑務が山積みになっていることを忘れて。当時の私は未熟であった。仕事の意味を十分理解できなかった。本当は重要な仕事を雑務だと思っていた。未だに雑務が多いと思っている私はまだまだ未熟なのか。

その後私は日鋼記念病院に1年半、国立札幌病院に2年半、市立士別総合病院に1年、日鋼記念病院に1年、癌研究会付属病院に2年間勤務した。そして8年ぶりに大学に戻った。この間各病院で多くの方にお世話になった。色々なことを経験し学んだ。私を指導して下さった先生方に感謝している。また、こういう機会を与えて下さった石川睦男教授に感謝している。

この10年間、私は産婦人科医として私より年期の若い先生と一緒に仕事をする事がほとんどなかった。大学では毎年新人の先生が入ってくる。これからはそういった若い先生との接し方も考えたい。

(産科婦人科)

解剖学実習を終えて

医学科第3学年 鶴岡 美穂

医学部に入学する数年前、両親から献体について相談を受けたことがある。死後に献体をしたいので、書類にサインして欲しいとのことだった。そこには、私がそれ以前には考えたことのないフィールドが、横たわっていた。いろいろと考えた末、本人達の意志ならばと思い、同意をした事を記憶している。その後、彼らは白菊会という、自ら死後献体となる意思表示をした人々の集まる組織に入会した。それ以降、その会から定期的に会報が送られ、集い等のお誘いがあり、献体を希望された方々の気持ちに接する機会に恵まれた。死後の自身の在り方にまで、深慮を持ち計画されて生きる生き方に、私は、当時大きく影響を受けた気がする。

月日が過ぎて、今度は私自身に、御遺体から直接学ぶ機会が与えられた。実習着に着替え、靴を履き

替え、ドアを開けると、毎回必ず身の引き締まる思いがした。百名強の学生達が、それぞれの思いを持って実習に臨んだと思う。実習室には、目にみえないけれど、連帯感があったような気がする。理由は人により様々であろうが、将来医師として医療に携わりたい気持ち。その日の終わりに御遺体に向かい黙とうする。それは白菊会で出会った方々の顔が問い掛けてくる厳しい反省の時でもあった。こうして、4月から6月までのほぼ毎日、御遺体と共同実習者であった土田君と長田君に助けられながら、私は貴重な日々を驚くような速さで過ごし去った。学ぶべき事の多さに圧倒されながらも、私流にいろいろと吸収して、なんとか無事に終わる事ができたのではないかと考えている今日この頃である。

医学部6年教育制において、3年生という折り返し時期の今、改めてモチベーションを刷新し高めて、後半に臨みたいと思う。最後に、故人・御遺族の方々並びに教官方に、感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

解剖学実習を終えて

医学科第3学年 中村 明枝

まだ、春休み気分の抜けきらない4月の中旬に、私達は初めて実習室で御遺体を前にしていた。解剖実習といえば、医学部の授業として一番最初に思いつくものであり、「やっとこの時がきた」という意気込みを持って解剖実習の初日を迎えた。しかし、実際に御遺体を前にすると、「これから自分と同じ人間の解剖をしなければならないのか」という不安がよぎった。だが、献体をして下さった方の意思にも反しないよう、多くのことを学ぼうと決意を新たにしたのである。

それからの2ヶ月半に渡り続いた解剖実習は正直、今までにないほど忙しくつらい日々だった。しかし、それと同時に今までにないほど充実した日々だったとも言える。毎日毎日実習で学ぶことは、決して教科書を読んだだけでは理解できないものであり、人

の体の構造の複雑さには驚きの連続だった。今から思えば、解剖実習の2ヶ月半はあっという間に過ぎていき、限られた時間の中で、全てのことを観察することはできなかったが、できる限りのことをやったと満足している。

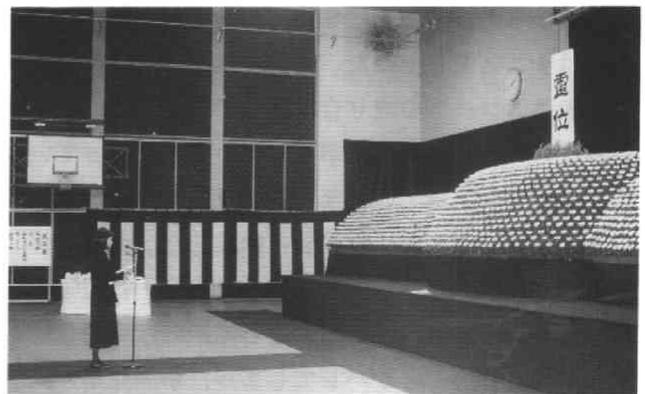
9月に行われた慰霊祭には、献体して下さった方の御家族が多数いらしており、献体して下さった方も、私達の知らない人生を送ってこられたのだと改めて実感した。そして、肉体は「死」をむかえても、医療の発展を望む「心」は生き続けており、その意志を解剖をした私達、学生に託していったのだと感じた。私達は献体して下さった方の解剖をさせていただきただけではなく、そのような意志も受け継いだのだということに気付いた。今はまだ未熟な医学生で、一人前の医師になるには多くの人達に支えられて、多くのことを学ばなければならない。だが、これからも決してその人達の意志を忘れずに、立派な医師を目指そうと決意を新たにしたのである。

解剖体慰霊式

平成10年度解剖体慰霊式が9月16日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

本年度の対象御遺体は、系統解剖33名、病理解剖45名、法医解剖71名で、慰霊式においては、諸霊の御霊に対しご冥福をお祈りするため黙とうが行われ、引き続き久保学長と学生代表(医学科第3学年鶴岡美穂)から追悼の辞が述べられました。

その後、御遺族と御来賓の方々及び教職員、学生の代表から献花が捧げられ、亡くなられた方々の御遺徳を偲びご冥福を祈念しました。(庶務課)



ク ラ ブ 今 昔

弓 道 部

看護学科第1学年 石山 桃子

旭川医科大学弓道部は昭和49年4月1日に、2期生の近藤先生、大崎先生、森川先生らの活動により発足しました。部創設以来、師範の萬上義盛先生には、部の発展と部員の指導に御尽力頂きました。当時の顧問は黒島先生でありましたが、今は吉田先生にお世話になっております。

発足当初は道場もなく、旭川の弓道場を点々とし練習をする日々だったようです。しかし昭和56年に道場が新設されて以来、部員数も増え、成績も年々向上しています。最近の成績では、東医体3年連続ベスト3位の他、女子個人では4年の油川さんが優勝、選手権では4年の黒澤さんが個人戦6位、新人戦は2年の橘さんが4位、そして争覇戦においては女子は四部リーグで例年になく健闘し、男子は二部リーグ昇格とかなりの好成績を修めています。また、

各種の市民大会に出場しては優勝したいと、積極的に活動しています。

練習は通常週4回、夕方5時から公式練習である競射が始まり、その後は自主練という形になっています。熱心な人は夜10時頃まで練習し、時々朝が休日など暇を見つけては道場に引きにきています。

弓道部の特徴としては、他大学との対抗戦が多いことが挙げられます。そして、試合後には互いに交流を深め合うわけですが、これは非常に楽しく、部員同士の間で後々まで語られる程です。また、夏は焼肉・海・キャンプなどイベントが盛りだくさんのも楽しみの一つです。

このように弓道部は明るい雰囲気の中、11月前半まで日々熱心に練習しています。

最後になりましたが、毎年多大な援助をして下さるOBの先生方にお礼を申し上げます。これからも我々弓道部は、向上心を忘れず、技と精神の鍛練に励んでいきたいと思っております。

合 唱 部

合唱部部长 田代 直彦

私たち合唱部は、歌を歌うことをこよなく愛する人々によって昭和60年4月1日に創設されました。さらにそれだけでは飽きたらずその歌声を是非とも皆さんに聴いていただきたいという心から、サマーコンサート、音楽の夕べ、クリスマスコンサートと年3回のコンサートを開いており、サマーコンサート、クリスマスコンサートは今年で12回目を迎えます。今年は新入部員が21人と例年に比して多く、サマーコンサートでは40人を上回るという合唱部創設以来の人数となりました。

合唱の練習は昼休み週2回、平日放課後1回、土曜日1回に行っています。学年が上がるにつれ講義や実習が忙しくなる中、また部員のほとんどが他の運動系または文化系の部活やサークルと掛け持ちしておりその忙しい合間を縫って音取りをしたり、合

唱練習したりしています。特に夏は多くの運動系部活にとって試合のシーズンに当たるため、なかなか練習に参加できなかつたりして一つの曲を作り上げるのにも一苦労といったところです。

また部員の多くは「小学校から高校での音楽の時間以外、ピアノやヴァイオリン、声楽のような専門的に音楽をやったことがない。」という人がほとんどを占めています。とりあえず歌を歌いたいという人が集まっているのです。このような歌を歌いたいという純粋な気持ちをくみ取っていただいて協力してくださっている学校・病院関係者の方々、お忙しい中歌を指導してくださっている先生、並びに顧問の小川勝洋先生（病理学第一講座教授）に感謝するとともに、13年前に先輩方の築かれたこの合唱部の精神を汚すことなく活動していき、またこれからも先もそうであることを願っております。



旭川医科大学に留学して

大学院 第4学年

アイノリイー ピーター ゲサセ

When I first came to Japan in October 1993 I found three foreign students from non-Asian countries, they have all gone and it is my turn to say good bye to Asahikawa Medical College. My academic life has been successful and I would like to thank the Monbusho, and Professor Kazuyuki Ono for allowing me to study in Japan. The knowledge that I have acquired here will be useful when I go back to my country.

Education is one of the basic tool in any developing society. Hence, providing chances for education to the citizens of the so called developing countries remains to be the best approach for improving their socio-economic conditions.

Throughout my stay in Japan I have admired the research privileges enjoyed by the Japanese scientists. The laboratories have modern equipment's, research materials and up to date books and journals. With lack of such opportunities in my country the research activities will be limited when I go back home. It will be good, and I think this is one of the objectives for these scholarships, to be able to perform some research and train the local scientists when we go back to our countries.

During my stay in Asahikawa medical college I received enormous support from Prof. K. Ono in academic and non-academic matters. Apart from learning various techniques in morphology and cell biology, he created a conducive environment for me to carry on with my studies. At the beginning of my study program he told me I am free to work as any other person and there are no limitations on whatever you want to learn. This was encouraging to me and I am leaving Japan with fundamental techniques in basic sciences. I have attended several scientific meetings that were relevant to my subject. Apart from getting a clear picture on the scope of basic science in Japan I learned many new things in particular how to integrate various disciplines when planning for a research project. Prof. Yohichi Satoh is a person whom I will live to remember, he did a lot to me academically when he was here and when he moved to Iwate Medical University. In 1996-97 I spent 6 months in his laboratory learning techniques in measuring intracellular calcium dynamics. While I was in morioka we visited his parents on new year eve. This was a unique experience for me as I was able to see how the Japanese people cerebrate the new year, I got the impression that despite economic development, Japanese have not forgotten their culture. In Tanzania when people attain a higher socio-economic status they tend to disregard their culture. I would like to thank Dr. K. Ishikawa and Dr. Y. Oomori for their tremendous support and Mr. Sasaki and Hazawa for helping me during my stay in the first department of Anatomy. I would like to thank Prof. H. Kiyama for exposing me to the biology of the nucleic acids and their application in the study of nerve regeneration.

Despite people of my laboratory, I would like to extend my sincere thanks to the following people: Prof. I. Makino for giving me the moral support and encouragement when my father died in may 1997, Mr. K. Miyakawa for his tireless technical assistance and material support for my experiments in the electron microscopy laboratory. To Mr. S. Takeda of the student's office for his cooperation and guidance on non-academic affairs and finally to the entire volleyball team with whom I have enjoyed playing volleyball and maintaining my physical strength.

Again I would like to thank the government of Japan and the Japanese people for showing the spirit of international cooperation. It is my hope that the helping spirit to the developing countries will continue to grow among the Japanese people.

私は1993年に初めて日本にきました。そのときは、アジア以外の国からの留学生は3人おりましたが、その時の人たちはすべて帰国し、こんどは私が旭川医大にさよならを告げる時がきました。こちらでの研究生生活に大変満足しております、またこちらで私に研究を許して下さった小野一幸教授はじめ文部省に厚く御礼申し上げます。ここで得た知識をタンザニアにかえてから生かしたいと考えています。

どの発展社会においても教育は最も基本的な手段であると思っています。したがって、いわゆる発展途上国の人々にとって教育の機会を与える事はその社会・経済状況を変える最も重要なアプローチとなると思います。日本滞在中に私は、日本人科学者によって享受されている研究の豊かさに驚かされました。たとえば研究室にある最新の設備、器械そして最新の本や雑誌などです。そのような機会のない私の国では、帰国してからはその研究活動は限定されたものになると思います。帰ってからその国の科学者を育て、研究が出来るようにする事は、奨学金制度の目的の一つであると思っておりますが、大変良いことだと思っております。旭川医大に在学中に私は、学問の分野ばかりでなくその外のことで小野教授に大変お世話になりました。彼は、私の研究環境を作って下さり、始めの頃はやりたい研究を制限なしで自由にやらせて下さいました。このことで私はずいぶん元気が付けられ、そして基礎科学者として基礎技術を身につけて日本を離れる事が出来ます。また私の研究に関連する学会に何度か出席する事も出来ました。そこで、私は研究を計画するときに、それをどのように組み立てて完成させるかを新たに学びました。また以前本学におられ、現在は岩手医大に移動されました佐藤洋一教授には本当に多くの研究を教えていただきました。1996年-1997年には佐藤教授の研究室で6ヶ月間細胞内カルシウムの動態について学びました。盛岡に滞在中には、年末に彼の両親の家を訪ね、その時に、日本人がどのように新年を祝うかを知る事が出来ました。私は、経済発展にもかかわらず、日本人が自分たちの文化を忘れていないという印象を受けました。タンザニアでは、人々はより高い社会・経済的地位を得ると、自国の文化を無視する傾向があります。また解剖学第一講座の石川一志先生、大森行雄先生、佐々木孝志、羽沢和美技官いろいろとお世話になりました厚く御礼申し上げます。また分子生物学とその神経再生研究への応用について学ぶ機会を与えて下さった木山博資教授に心より御礼申し上げます。

研究室以外では、第二内科の牧野勲教授には1997年4月に私の父が亡くなった時に、いろいろと助ましていただきました、厚く御礼申し上げます。また電顕室の宮川清志技官にはいろいろな技術的援助を受けました、有難うございました。学生課の竹田定好事務官にはいろいろとお世話になりました、またバレーボールチームに参加させていただき有難うございました。

最後にもう一度、日本政府と国際共同の精神を示された日本の皆様へ厚く御礼申し上げます。発展途上国に対する助け合いの精神が日本にあり続けることを心より祈っております。

公開講座実施される

平成10年度本学公開講座が『知っておきたい腎臓の働きと病気』をテーマに10月6日(火)から10月27日(火)までの実7日間、ニュー北海ホテルにおいて開催されました。

年々増加の傾向にある腎臓病を本学の専任教官等が各自の専門分野からスライドを使いながら受講者に分りやすく解説し、個々の健康管理に役立てて欲しいと願う熱気が伝わってきました。

今回のプランナーとして、獅子奮迅のご活躍をいただきました八竹教授をはじめ関係教職員に心から感謝申し上げます。(学生課)



研究室紹介

生化学第二講座 鈴木 裕

本講座は昭和52年、金沢徹教授の就任によって開講された。講座の現構成メンバーは金沢徹(教授)、鈴木裕(助教授)、大保貴嗣(助手)、山崎和生(助手)、坪田淳子(事務官)である。大学院生であった斎野朝幸は博士号取得後、本年4月岩手医科大学解剖学第2講座に助手として赴任した。

細胞膜や細胞内膜系には種々のイオンポンプが存在していて、細胞のイオン環境を保ち細胞が正常な機能を営む上で必須の役割を果たしている。本講座の研究対象は、ATPをエネルギー源としてカチオンを輸送するカチオンポンプ(Ca^{2+} ポンプ、 Na^+/K^+ ポンプ、 H^+/K^+ ポンプ等)である。これらポンプ蛋白の分子構造がどのように機能して輸送を引き起こすかを理解し、さらにポンプの構造と機能のいかなる異常が生体機能の障害をもたらすかを知ることが本講座の研究目的である。従来より行ってきた蛋白質化学的、速度論的、また分光学的、物理化学的手法等による解析に加え、現在では分子生

物学のおよび遺伝子工学的手法を駆使して、輸送の分子機構および細胞におけるポンプ蛋白発現についての解析を進めている。

講義では“生化学第二”を担当している。生体は自らが用いる形のエネルギーや自らを構築する物質をいかにして環境から取り入れ形成するか、これら代謝のどのような異常がどのような病態をもたらすか、等について講義している。多くの研究の蓄積から組み上げられた体系のすばらしさ、生体の妙を感じ理解してもらおうと努めている。生化学について、また本講座の研究について興味や疑問質問のある方はどうぞ気軽に当講座をお訪ねください。





訃報

第2学年学生 森 登志郎君が、病気療養中のところ平成10年8月27日急逝されました。

森君は、大阪府立旭高等学校卒業後、北海道大学に入学、同大獣医学部を卒業し、医学を志し本学に入学、熱心に勉学に励んでいたが、志半ばで不帰の人となりました。

ここに謹んで森君の御冥福をお祈りいたします。(学生課)

体育大会実施される

毎年恒例の学生主催による体育大会が9月9日(水)にサッカー・綱引き等6種目が実施された。

当日は昨夜来の雨が少し残っていたが、学年の名譽をかけ、お互い叱咤激励し合い各種目で熱戦が繰り広げられ1日中歓声があがっていた。

なお、総合優勝は(医)第5学年、2位(医)第2学年。(学生課)



教官の移動

辞職	H10.9.30	麻酔・蘇生学	助教授	久保田宗宏
昇任	H10.10.1	薬理学	教授	牛首 文隆
採用	H10.11.1	耳鼻咽喉科学	〃	原測 保明
〃	〃	麻酔・蘇生学	〃	岩崎 寛
昇任	〃	公衆衛生学	〃	羽田 明
〃	〃	生理学第二	助教授	高草木 薫
採用	〃	英語	〃	室松 慶子



怒外

北村 久美子

仙人が教えてくれたこと

春は「緑のそよ風いい日だね、蝶々もひらひら豆の花…」と車で鼻歌交じりで飛び回り、冬は防寒具に身を包み、雪の降る町をとぼとほ歩き回っていた新米保健婦の頃のことである。

私は、経験豊富な3人の保健婦が駐在するK町(当時の人口約8,000人)に就職した。先輩保健婦は、町の人々の健康生活に責任を持つという立場から、健康に関する啓蒙・相談はもとより、子供の進路など各種相談に昼夜をわかず熱心に応じていた。私は新米ということで役場勤務であったが、時には担当地域に駐在する日もあった。すると仕事が終わった夕刻、その地域の人々が注射液を持参して「注射をして欲しい」「足をケガしたので診て欲しい」「病院から薬をもって来て欲しい」などと押しかけて来たのには驚いてしまった。また、先輩保健婦や役場の福祉担当者が、住民一人一人をきめ細やかに見守り、献身的に支援している姿に感動したものである。特に、先輩保健婦には「看護の心」を、そして長年福祉行政に従事していた役場の福祉担当者からは「福祉の心」を教わった。K町では、私のこれまでの生涯で忘れられない出来事があった。

長年勤務した職場を無事定年退職したAさんは、こともあろうに退職金を全部賭け事に使い果たしてしまったのである。Aさんは家族に申し訳ないと言って、遠く人里離れた幾重にも連なった山奥の古い飯場小屋で隠遁生活

を始めた。その為、私たちはAさんのことを「仙人」と呼んでいた。Aさんは残雪の時期になるとソリを引いて、塩や米など日用品の買い出しに山から下りて来ていた。地域の人々はこぞってAさんに街に戻って来るように呼びかけたが、Aさんは頑迷に拒み続け自分の意志をつらぬきとおした。この町ではAさんだけが結核検診などの各種検診に來られなかったため、その地域の検診率は残念ながら99%であった。検診率100%に達しないことよりもAさんの健康を常に案じていた駐在保健婦は、Aさんの住む山に向かって毎日「どうか今日一日Aさんが無事でありますように」と合掌していた。また、役場の福祉担当者は地域の小学校の教師と一緒に春と冬、Aさんの生活が心配ではるばる隠遁の地まで出かけて行った。冬はスキーでの訪問である。私も一度同行するよう誘われたが何かの都合で応じられなかったことが、今でも悔やまれてならない。その福祉担当者からAさんの様子を詳しく教えてもらい安堵の胸を撫で下ろしたものだ。様子を聴くと玄関の戸は無く、筵1枚、電気やランプも無く太陽と共に生活し、室内は暗く囲炉裏で暖をとり食事を作っているという。熊が出没するため長い棒の先に出刃包丁をくくり付けて、いざという時に備えている。戸外には穴が掘られてあり病気になった時には、その穴に転がり込んで死ぬのだという等々…。そこには、Aさんの家族ばかりではなく保健婦、福祉担当者、小学校の教師などが、自分たちの問題として彼方の山中にひっそりと住むAさんの身の上を案じ熱心に見守る人々がいた。

今日の高齢社会では「個人が人としての尊厳をもって、家庭や地域の中で自らの意志に基づいてその人らしい生活が送れるように支える」という、至極当然なことが盛んにいわれている。尊い人命や生活を支えるために、行政や職場の枠を越えみんなが腕を組んで真剣に対処することの大切さを、Aさんは命を賭して教えてくれたように思う。誰もが安心して老い、暮らしていける町づくりを、これからも問い続けていきたい。